「息子へ ～質問の手法」

総合情報学部教授
亀井克之（かめい かつゆき）

「息子へ」と題し、社会学部の松原一郎先生が『葦』2008年秋冬号に書かれた異色の文章が気に入っている。末のお子さんが巣立たれ、3人の子育てを終えられた後の喪失感と、「親である病」という完治しない「人生習慣病」と向かい合う日常を等身大に綴られている。

この春、3兄弟の長男が、地方で一人暮らしを始めた。今は、次男と三男の子育てに追われているが、いずれはみな独立する時が来る。その時は「息子へ」の名文に託された先生の境地に至るのだろうか。

大学生の親となって、授業料や下宿生活の諸費用の負担がいかに大変か実感できるようになった。自分もこんな苦労をかけていたのかと両親の有難さも再認識した。（幸い元気で昨年金婚を祝った。）

独立志向の強い息子だったが、離れてしまうと、とても心配だ。

なのに受話器の向こう側とうまく対話できない自分がもどかしい。

子供と同学年の学生を教える時が来て、新たに「質問する力」を指導目標とした。2000年に『葦』春号で紹介したプレゼンの手法10カ条（HPで六甲おろし替え歌化）を指導してきた。10年間で学生のプレゼン力は向上したが、依然として質疑応答が活性化しない。

「質問の手法」は一カ条のみだ。「発表者が答えられる質問をする」。王選手の通算本塁打を尋ねるような、知識がなければ回答不能の質問は控える。質問するぞと思って話を聴き「具体的には？」「どうやって調べましたか？」等、話の枠内で回答できる質問をする。

「たくさん調べて少し話す」という鉄則があるが、発表者は調べたことの3割は質疑応答用にとっておく。これを引き出すような質問をする。プレゼンは発表者と聴き手との共同作業だと考える。

質問は対話の第一歩。遠く離れた息子に、まずは「元気？」から。